

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(34)〉

## 「保育者養成」をめぐるメール書簡(2)

— 実習体験の語り合いから生まれる喜び —

上垣内伸子

佐治由美子



前回の第一信は、お茶の水女子大学（以下お茶大）

の「保育臨床実習」と十文字学園女子大学の「幼児教育基礎実習」が、共に実習後の話し合いによる振り返りを大切に行っていることを紹介しました。そして、実際に保育の場で子どもと保育を観察し、かかわってみることで、振り返って記録し、体験を共有する仲間と話し合うことが、保育者としての振る舞いの前提となる子ども観・保育観を形成するうえで役立つのではないかとということを確認しました。

第二信では、担当する教員の揺れや気づきについて

語り合いたいと思います。

### 上垣内から佐治への第二信

佐治 由美子様

「幼児教育基礎実習」の受け入れをお願いしている実習園の多くは、子どもの自発的な遊びを中心とした保育をしています。実習生は、子どもの内なる思いを感じ取り、寄り添い、応えていくという姿勢を大切に、

一人ひとりとしつくりかかわって一日を過ごします。

この授業を担当し始めた十二年前、一人ひとりに応じる保育実践と、FB（フィードバック）授業の形態や進行、担当教員と学生の関係は、マトリョーシカのよくな相似形ではないかと気づきました。全員のレポートを読んで授業に臨む教員側は、事前にその回のねらいと進行を考えています。けれどもいったん話し合いが始まれば、個々の学生の発言によって内容も方向も決まっていくことを尊重し、その中で学生一人ひとりの実践や考え方を受容し、自分らしさを発揮することを出発点とした学びに対して援助的にかかわることに専心します。その姿勢は保育者のそれと同型であり、FB授業は、保育を保育的に学ぶという構造をもっていると考えています。この気づきが、養成校の教員としての「私」を作ったような気がしています。

とはいえ、初めのころは、どうかかわるのが正解なのかと答えを求めめるような発言や、このかわりでは

いのか？ と承認を求めめるような態度に対して、この実習ではかわりを通して子どもの内面の理解を求めているのにと、その発言を受け止められないこともありました。規則を過剰に守ろう（守らせよう）としたり、公平性を重視したりという、素朴教育学とでもいうような先生のかかわりが認めがたく、私自身が教示的になったり、誘導的な発言をしてしまうこともありました。まるでモグラたたきのように、ねらいから外れる発言を押しえなくなつたのです。そんな状況は今もあまり変わらないのですが、私を焦らせるような発言は、集団全体の理解をむしろ深めるきっかけとなつていくのだと思えるようにはなつてきたと思います。

昨年の一回目の実習後のFB授業で取り上げた記録と話し合いの一部を紹介しましょう。

Aさんのレポート（一部分を抜粋）

「お弁当の時間、T君が何かちよっかいを出したらしく、Kちゃんが「やめてよー」と言った。その時、

私の方を見ながら言っていたような気がした。すると、またT君が何かしたらしく、「やめてよ」と言いながら私の方を見た。それが三・四回続き、私は、Kちゃんは私に気づいてT君に注意をしてほしいと思っているのだらうと思った。しかし、「やめて」と言っているけれど、そんなに嫌がっている様子ではないと思つたのと、一方的にT君に「ダメでしょ」と言つてやめさせるのも良いことなのかわからなかつたので、二人の所に行くことができず、Kちゃんの視線にも気づかないフリをしてしまつた」

Aさんは、その時は二人にどのような声をかければよいのか、T君に何と言つて注意をすれば良いのかわからず行動できなかつたけれど、今思うと、近づいていって、二人の話を聞くことだけでもすれば良かったと後悔していると語り、それを受けて、どのようなかわりの可能性があるか話し合いました。

B「やめてよ」と言っているのだから差し迫っているわ

けで、だから『何がイヤなのかな?』『どうしたの?』と声をかける。無視しているんじゃないよ、気づいているよという意味」

C「嫌そうじゃなくても、何度も続くからそばに来て話を聞いてほしいのでは? だから、T君に注意するのではないけれどそばには行つてみる」

D「Kちゃんには、この先生ならという期待があると思う。気づかないふりをする、拒否された、無視されたという気持ちが強くなるのでは?」

E「嫌というのではなく、見ていてほしいのかも」

F「やめてといっているのは事実なので三・四回続いたら行くけど、一・二回目は見るだけ。T君にも言い分があるかも知れない」

G「ちょっとは自分で解決してほしい。自分で解決しなよとそばに行つて言えば?」

実習園が違つても、似たような状況に対して、手探りで懸命にかかわってきたという体験を共通基盤とし

て、自分なりの考えを出し合います。私は、話しやすい雰囲気と流れを作り出すように努めています。以前なら気になっていたGさんの発言ですが、ここでは、うっかりすると予定調和的な発言に終始しそうな雰囲気を断ち切るような作用がありました。自分の意見に仲間の発言が重なっていくことで、自分の考えを明確にしたり、新たな発想を得て自分の実践に対する理解を変えたりしながら、学生自身が語りながら考えを深めていく、ポリフォニックな省察の場となることを目指したいと思っています。

上垣内 伸子

## 佐治から上垣内への第二信

上垣内伸子様

以前の学会報告<sup>注2</sup>の中で、授業の担当教員の気づきについてとても興味深く読ませていただいたことを思い出しています。「学生一人ひとりの実践や考え方を受容し、自分らしさを発揮することを出発点とした学び

に対して援助的にかかわろうとする担当者の姿勢は、保育者のそれと同型」ではないか、という気づきでした。私もお茶大の「保育臨床実習」の授業の中で、繰り返し同じような思いを抱いています。そこで、この保育を保育的に学ぶ授業について、少し立ち入って考えてみたいと思います。提示してくださったように、保育的な学びのプロセスで生じた教員側の揺れをどのようににとらえたいのか、その困難さこそ、まさに保育の学びの特徴を表しているように思われます。授業の中で「ねらいから外れる発言を押さえなくなった」と教員の思いをそのまま書き表してくださいました。このことを、保育場面で子どもと保育者の間に起こることに置き換えて考えてみることにしましょう。

保育者は、いつもその日、その時の願いをもって子どもとかかわっています。そこでの保育の自由度が高ければ高いほど、保育者の思うようにならないことが多くなる中で保育は展開していきます。保育者側の思

うようにならない一種の閉塞感は、保育者が疲労感を覚えている時や、精神的なゆとりのない時には、たちまち子どもとの間に危機をもたらしることがあるように思います。このような危機は、いつでも保育の周辺を取り囲んでいます。そんな中で、保育者は子どもと共にその危機の時をもちこたえ、子どもの成長する力に励まされるようにしていつの間にか乗り越えているのだと思います。ここで「いつの間にか」という表現を用いたのは、危機を乗り越える力が子どもと保育者の間に蓄積された相互信頼の力によるものであることを意味しています。保育者が一時的に感じる閉塞感も、実は保育のプロセスにおいて子どもとの間で開かれていくはずのものであり、そのような相互性を生きることが保育の醍醐味であるといってもよいでしょう。ですから保育者は、保育の営みそのものへの信頼に支えられて、子どもと共に育ちゆく存在だと言ってもいいのかもしれない。

授業の中で学生の発する「私を焦らせる発言」も、まさに、保育的な学びのプロセスを私に感じさせました。学生との間で感じられた危機感も、もとをたどれば「学生らしさを発揮することを出発点とした学び」から発していますね。学生がその人らしく言い表した発言は、どのような内容であれ、受け止められなければその場の学びとしては成立していかないでしょう。受け止めにくい発言でも「集団全体の理解をむしろ深めるきっかけとなっていくのだ」という気づきは、ここでの学びをとらえるうえで、この危機をくぐり抜けてマイナスからプラスへと方向転換が起こっているように感じられます。このような教員の姿勢こそ、学生一人ひとりの存在に向き合う対等感を土台として学生と共に成長していこうとする、まさに保育的な学びを形づくっていく大きな力になっていくのではないかと、私も気づきを与えていただいたように思います。受け止めにくい発言も、話し合いの雰囲気壊さな

いような発言に終始してしまいやすいところを打開してくる作用があったのですね。どのような発言であれいろいろな意見の重なり合いを通して、学生それぞれが自分を作りかえながら考えを深めていく授業は、かけがえない相手がいるからこそ、その相手に添って自分を変化させようとする保育的行為と、まさにマトリョーシカのような相似形であるように思います。

教員が支えつつ促す中で、学生同士が相互的に省察を深めるプロセスにポリフォニー性があることを、私は昨年度の学会報告で触れて以来考え続けていますが、この概念は視点の置き方によって異なる意味もちうるように思い、ポリフォニーという言葉にくくれる学びの相互性についても一度ていねいに考える必要を感じているところです。

ポリフォニーを語る際の他者性の問題を保育の側から考察しつつ、保育を保育的に学ぶことが保育者養成においてどのような意味をもつのか、今後明らかにし

ていければと思います。

佐治 由美子

二回にわたって「保育者養成」をめぐるメール書簡を掲載させていただきました。ここでの語りは、これからも続くであろうやりの、ほんの始めの部分にすぎないものです。ここで扱っているテーマは、私たちそれぞれの所属大学に限られたことではなく、省察に重きをおく授業であればどの養成校の方々とも共有していくことのできるものではないかと考えています。今後共に考えていく場をもつことができれば、と願っている次第です。

上垣内伸子 (十文字学園女子大学教授)

佐治由美子 (お茶の水女子大学専任講師)

注

- 1 多声性。独立した複数の声絡み合いつつ進行する様態。
- 2 実習指導に関する詳細な報告が、保育学会「第五十一回大会」から「第五十六回大会」においてなされている。